

なか はら
中 原 遺 跡
第2次調査

久留米市文化財調査報告書第221集

2006

久留米市教育委員会

序

九州全体の浮揚と県南の地域振興に大きな役割が期待されている九州新幹線。新幹線鹿児島ルートが開通すれば、交流圏域は飛躍的に拡大し、すでに地域振興の点で成果を生み出しています。

今回報告する中原遺跡第2次調査は、九州新幹線建設に伴い調査を実施し、奈良時代の集落跡であることがわかりました。中原遺跡は従来江戸時代の集落跡として知られていましたが、さらに奈良時代まで遡ることができ、新たな知見を得ることができました。本書が、本市の歴史を探るうえで、また、文化財保護の理解と普及の一助として役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、ご理解とご協力をいただきました独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局をはじめ、関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成18年1月31日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集 充

例 言 ・ 凡 例

1. 本書は、福岡県久留米市教育委員会が、平成17年度、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局に委託を受け実施した福岡県久留米市梅濱町に所在する中原遺跡第2次調査の発掘調査記録である。なお、この調査の略称は NKB-002、調査番号は 200514 である。
2. 平成17年4月1日付け機構改革により、久留米市教育委員会教育文化部文化財保護課は久留米市文化観光部文化財保護課となったが、文化財行政に関わる事務は、久留米市教育委員会の委任により、久留米市文化観光部文化財保護課が執行する。
3. 出土遺物の整理は、本田岳秋の指導のもと、打山吉江・林田理奈が行った。
4. 遺構及び遺物の実測図は本田が作成し、製図は本田が行った。本書に掲載した写真は本田岳秋が撮影した。執筆及び編集は本田が行った。
5. 本書に関する実測図・写真・遺物等の記録は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、本書刊行後、活用を図る。
6. 使用した方位は、座標北である。また、本書で使用した記号は、SK：土壌、SD：溝状遺構、SP：ピットをそれぞれ示す。

本 文 目 次

I はじめに	1
II 遺構と遺物	2
III おわりに	4

I はじめに

1 調査の経過と調査の体制

九州新幹線建設に伴い、平成16年1月20日、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業本部から「埋蔵文化財包蔵の有無について（照会）」が提出される（15文財第1-474号）。同年1月30日、当該地は調査例がなく埋蔵文化財包蔵の有無が不明であったため、試掘調査を実施し、埋蔵文化財の所在を確認する。このため、新幹線建設工事の際発掘調査が必要である旨を回答し、保存に対する理解と協力を求める。平成17年6月9日、埋蔵文化財保存に対する協力に応じ、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部から「埋蔵文化財発掘調査の依頼について」が提出される（回答：17文財第307号）。7月19日、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局と久留米市との埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、発掘調査を実施する運びとなった。

平成17年8月22日、0.4BFを使用し、表土剥ぎを開始する。同日、ユニットハウス2台と簡易トイレ1台をレンタルする。遺構密度が低かったため早期終了を目指して実施していたが、9月4日から、台風14号の接近に伴い作業に遅れを生じた。しかし9月22日、0.4BFを使用し、埋め戻し作業を実施し、契約期間内で調査を終了することができた。

調査の体制は以下のとおりである。

調査主体：久留米市	市長 江藤 守國
調査総括：文化観光部	部長 緒方 眞一
文化財保護課	課長 関 知彦
	課長補佐 立石 雅文（課主査兼務）
	事務主査 松村 一良・大石 昇・近澤 康治
	庶務担当 榎藤 節子
	調査担当 本田 岳秋

発掘調査臨時職員

勝田美代子・河野 好子・塚本 明美・津留崎利子・中村多津子
中村 廣・野口カヲル・原口 貞子・森 啓恵・安本カズ子

なお、調査に際して、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局用地第一課木佐一正和さん、久留米鉄道建設所加瀬正樹さん、九幹鹿・久留米松原B i 下部工他工事五洋・さとうベネック・廣瀬特定建設工事共同企業体石脇雅生さん、JR九州博多保線区稲村雅俊さん、梅満町自治会長城戸幸雄さん、鳥飼校区公民館主事中山良彦さん、久留米市議会議員塚本篤行さんをはじめ、多くの方々のご協力を得た。記して感謝いたします。

2 位置と環境

中原遺跡第2次調査地点は、久留米市梅満町579-7・593-11に位置する。当該調査地は標高12m程度に位置し、おこん川と金九川に挟まれた台地上に立地する。当該調査地の南西約250mに大隈公園があるが、標高約7m前後を示す。比高差は約5mである。久留米市役所16階からみると、ほとんど高低差を感じない平野にみえるが、現地に行くと、大きな高低差を感じることができる地域である。

中原遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地であるが、古墳時代後期～奈良時代の遺物も散見されるものの、むしろ、中原遺跡第1次調査では江戸時代の集落跡という成果が出ている。

当該調査地点の南西300mに鳥飼小学校校庭遺跡がある。奈良～平安時代の溝1条・土壌墓1基が検出されているが、当該時期の集落の様相を把握するには至っていない。また、中世の溝4条・土坑2基が検出されているが、当該地には大隈左近将監の居館があったとされ、その一端を示すものと考えられる。

宮ノ木遺跡第1次調査では奈良時代の溝1条が、宮ノ木遺跡第2次調査では同じく奈良時代の溝3条・土坑1基が検出されている。

当該調査地点周辺は、調査例が少ない。当地は、律令期は「三潁郡鳥養郷」に比定されているが、断片的に奈良～平安時代の遺構が検出されているものの、未だに実態は不明である。従来、遺跡の分布は鳥飼小学校以西に集中していたが、今回の調査で分布がさらに広がることがわかった。今後の調査が待たれる。

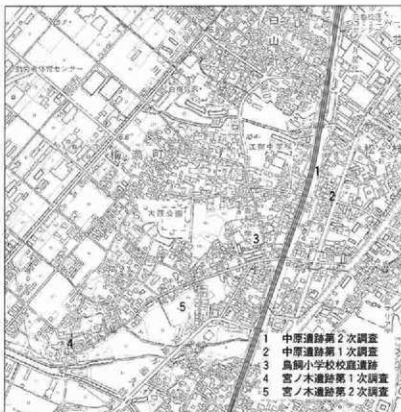


Fig. 1 中原遺跡第2次調査と周辺の主な遺跡 (1/10,000)

II 遺構と遺物

1 遺構の概要 (Fig. 2)

SK3 (Fig. 2)

遺構の規模は全くわからない。廃棄土壌としては出土状況に違和感を覚える。住居である可能性

も考えられたが、炉跡（竈）や明確な貼り床、柱穴等が検出できなかったため、土坑として取り扱った。土墳墓の可能性も確認できなかった。

SK3出土遺物 (Fig. 3-1~5)

須恵器の坏蓋2点、高台付坏1点、土師器の坏2点を出土した。いずれも完品である。須恵器は稚拙さが目立つ。とりわけ、1は焼成による歪みが著しく、重ね焼きの際に、上下の土器が張り付いてしまい、割って外している状態が生々しく残っている。

SP12 (Fig. 2)

直径30cm、深さ60cmのビット。柱穴として取り扱ったが、柱痕は確認していない。後で触れるビット群となんら異質さはないが、このビットのみ図化に堪える遺物が出土した。

SP12出土遺物 (Fig. 3-6)

土師器坏1点が出土した。SK3と同様、8世紀後半と考えられる。

SD14 (Fig. 2)

幅2.7m×深さ0.9mのV字溝である。近世の陶磁器を伴うが、近代と判断できるものもない。近世のU字溝はよくみるが、V字溝はあまりみかけない。江戸時代の絵図によると、このあたりは村落とのこと。単純に、農業用水路と考えておくべきか？

ビット群について (Fig. 2)

直径20~40cmのビットが数十基検出された。深さはようやく人の手が届くくらい深く、最も深いものだと80cm程度になる。埋土はいずれも同じような特徴を示す。柱穴と考えて取り扱ったが、柱痕は確認できず、建物として並べることもできなかった。一部、植物の腐食によるものが含まれる可能性もある。

遺物は土師器の細片が多いことから、SK3やSP12と同時期と考えられる。

中原遺跡出土石器 (Fig. 3-7)

黒曜石製の石鏃1点が出土している。

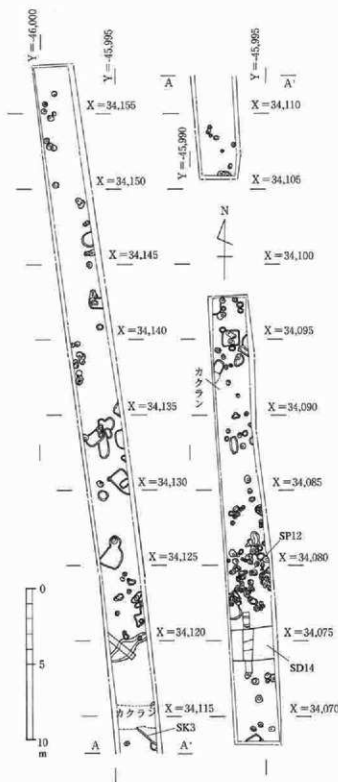


Fig. 2 中原遺跡第2次調査遺構配置図 (1/250)

石鏃が伴う時期の遺構は確認していないが、奈良時代のピットから弥生土器の細片が出土している。今回の調査では確認できなかったが、中原遺跡の調査は、今後、弥生時代の遺構も想定しておく必要があろう。

IV おわりに

まずは最初に、2.5m幅のトレンチ調査であったため、多くのことを語ることはできないことをお断りしておく。試掘段階で土坑を確認し、古墳時代後期～奈良時代の集落であると判断して、本調査を実施している。本調査の結果は、明らかな住居跡や建物跡、井戸等は確認できなかったものの、大まかに奈良時代の集落ということであろう。

検出された遺構も少なく、出土した遺物も少ない。SK3から完形品の須恵器3点とほぼ完形品の土師器2点が出土した。出土状況から土坑ではなく住居の可能性も考えられるが、大半を攪乱に破壊されているため、遺構の種類は判断できない。カマド・貼り床等は確認していない。SP12から土師器1点(残存率1/2)も出土し、SK3と同じ時期を示す。

一方で、ピット群についてはなにも解決できなかった。狭い調査幅が起因して並べることができなかった可能性もある。

さらに、あくまでも可能性の問題であろうが、今後の調査のために特記しておく。遺構に伴うものではなかったが黒曜石の石鏃1点が検出され、弥生土器の細片や黒曜石・サヌカイトの剥片が散見される。明確な遺構を検出することはできなかったが、試掘調査では石器を伴う時期は想定されていなかった。今回の調査では、試掘調査の結果に基づいて古墳時代後期～奈良時代だけを想定して実施したが、今後弥生時代の遺構も想定したうえで調査を実施すべきであろう。

最後に、久留米市梅溝町は、律令期、三潞郡鳥養郷に属していたと考えられている。ただし、その実態については未だ明らかになっていない。今回の調査でも、8世紀後半の土器が出土しました、というだけで、住居や建物など、生活を大きく示す遺構は検出されていない。中原遺跡及び三潞郡鳥養郷の調査は今スタート地点に着いたにすぎない。

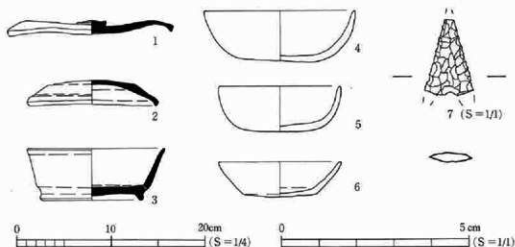


Fig. 3 中原遺跡出土遺物実測図 (1/4・1/1)



調査全景（南から撮影）



S K 3 土器出土状況



S P 12 土器出土状況



S K 3 出土遺物



S P 12 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なかはらいせきだいにじちようさ							
巻 頭	中原 遺 跡 第 2 次 調 査							
副 書 名	九州新幹線鹿児島ルート鉄道整備建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次	1							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第221集							
編 著 者 名	本 田 岳 秋							
編 集 機 関	久留米市文化観光部文化財保護課							
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3							
発 行 年 月 日	2006年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
中 原 遺 跡 第 2 次 調 査	福岡県久留米市 梅濱町	40203		33° 18' 24"	130° 30' 21"	20050822～ 20050922	250 ㎡	九州新幹線建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中 原 遺 跡 第 2 次 調 査	集落	奈良 ～ 平安	土坑	1基 ビット多数	須恵器・土師器 石器			
要 約								
明らかな住居跡や建物跡、井戸等は確認できなかったものの、大まかに奈良時代の集落ということであろう。検出された遺構も少なく、出土した遺物も少ない。SK3から完形品の須恵器3点とほぼ完形品の土師器2点が出土した。出土状況から土坑ではなく住居の可能性も考えられるが、大半を攪乱に破壊されているため、遺構の種別は判断できない。カマド・貼り床等は確認していない。SP12から土師器1点（残存率1/2）も出土し、SK3と同じ時期を示す。さらに、あくまでも可能性の問題であろうが、遺構に伴うものではなかったが黒曜石の石鏃1点が検出され、弥生土器の細片や黒曜石・サヌカイトの剥片が散見され、今後弥生時代の遺構も想定したうえで調査を実施すべきであろう。								
土木工事の届出日			平成17年6月29日			遺物の発見届出日		平成17年9月27日

中原遺跡第2次調査

久留米市文化財調査報告書 第221集

平成18年1月31日

発行：久留米市教育委員会

〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3

印刷：香和印刷株式会社